

研究紹介:「展示でフィールドワークする」とは いかなる思考とイメージをもたらすか？

土田亮(日本学術振興会特別研究員PD@東京大学大学院総合文化研究科)



▲▲
本発表のスライドpdf版を
google driveで
共有しています。
適宜スキャン
参照してください

自己紹介

土田 亮(つちだ りょう) 1994.07.04生

経歴：宮崎県出身・育ち (高校まで宮崎県宮崎市に住み、学んできました)

→九州大学 21世紀プログラム (教養学部出身で、都市計画とか地理学、哲学、心理学とか…専門がよくわからなくなる)

→京都大学大学院総合生存学館 総合生存学専攻 5年一貫制博士課程

(時間かけて学ぶなら、災害と人類学を学ぶか…！の気分。磯部先生とはMIの際のメンターとして出会う)

→博士(総合学術)取得 2023.09 コロナ禍とスリランカの政情不安・経済危機でFWを断念しながらもなんとか取得

→東京大学大学院総合文化研究科 文化人類学コース所属 学振PD

(だんだん北上…。田舎者ゆえに関東の暮らしがイメージできず、引き続き京都に住む)

専門・気になること：災害研究・人類学・宝石…？

= 災害と日常のあいだを考える、それは何を意味するか？を考える

フィールド：スリランカ、日本 (佐賀県、宮崎県、石川県など)

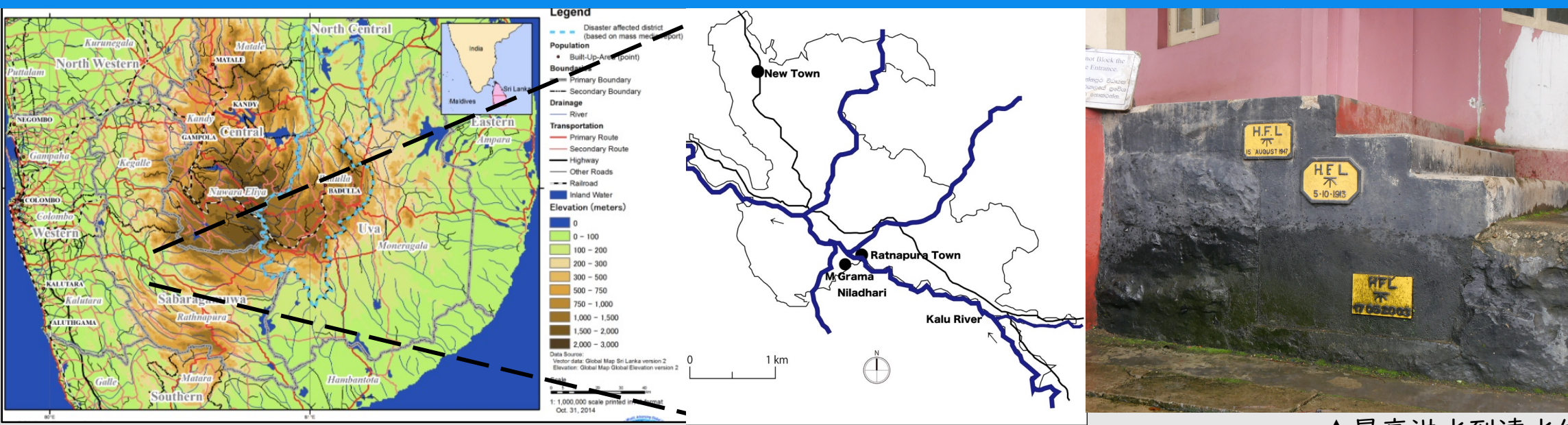
趣味：風景を撮る ラーメン・カフェ巡りについてにあてもなく散歩

宝石集め (24年3月に10万円分宝石を買わされ、

24年7月に誕生日にスリランカで自分へのプレゼントで買う、など)



スリランカ・ラトゥナプラ市の地域の概略



▲最高洪水到達水位1947.8.15
1913.10.5
2003.5.17

※フィールド決めの2017年5月（M1）に豪雨災害があったこと、寄付したこと、
スリランカでスタディーツアーがあった際に知り合ったおじさんから声がかかったことからFWを始める

- ✓ 地理的な特性に起因する被災可能性や発展途中の社会基盤による脆弱性により、水害が人々を襲うリスク高い国と地域。
- ✓ モンスーンによって5月・6月、10月に洪水発生
50年確率の豪雨が1913年、1947年、1989年、2003年、2017年に発生(UDA 2020)
- ✓ 2017年5月には2日間で計600mmの雨を観測、ラトゥナプラ県で6万世帯（23.5万人）被災(MDM 2017)
- ✓ 2017年の災害でスリランカはGlobal Climate Risk Indexで世界2位（ちなみに直接の死者はほぼ出ない）

私のフィールド：洪水がほぼ毎年起こるスリランカの盆地にて

もしこんな災害が起こったら、どうする？ ほぼ毎年起こるならどうする？



ドローン撮影兼災害救助集団
Epic Hex Cam撮影

ラトゥナプラ市の
中心市街であり、
行政や経済、商業の
中枢機関が集う場所からの
ドローン撮影

はじめ右手が市役所
左手に運動場
正面は小さな商店街と
バススタンド
ぐるっと半時計に回転して、
木々の間、橋がかかっている
ところがカル川(Kalu Ganga)
川に隣接して住宅やお店が並ぶ
堤防や土手、護岸、ダムはない

頻繁に街中が水浸しになる地域では、どのように水害対策を行っているのか？

災害を生き抜くこと/災害とともに生きること

対策として、建物を作りかえること、関係性をたくさんつくること、経験をたよりにすること



▲ピロティ
(一階部分は吹き抜け状のお店、
二階以上は部屋
一階建てのお家の人は近所に逃げ込む)



▲小高い丘にある仏教寺
多宗教・多民族国家であるスリランカには
モスクや教会なども地域に点在
各信条のもとそこに行けば避難キャンプとして
機能していて、国や社会からの寄付で
お金や物資が届く



▲政府と気象庁などが作った
リアルタイム河川水位観測サイト
ただ、地域の人曰く、
「直接川や雨を見て考えた方が早い
国から補償金も来ないから
自分たちで助かるのが普通」

インフラや警報などに依存しない対策が展開？ でも本当にこれだけの理由で住めるのか？

災害の日常化、日常のなかの災害

もし、災害には遭いやすいが、宝石が流れ込んでくる地域でも住みますか？

➤ 豪雨や洪水、土砂災害によって、上流から盆地に水と土砂とともに流れこんでくる



余談：

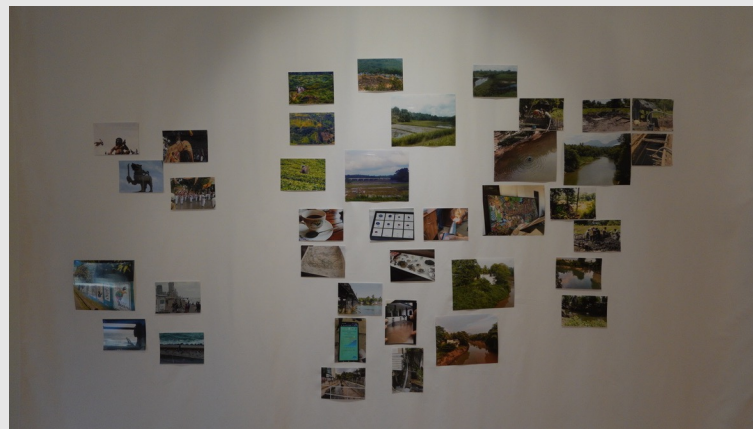
ラトゥナプラ(Ratnapura)は
サンスクリット語
(古代インド・アールリア語)で
Ratna/Rathna 光り輝く
Pura 街
だから、宝石の街

洪水と宝石が密接なかかわりをもつ場所で、あえてリスクを読んでそこに住むことの驚きと戸惑い

フィールドワークを展示する

フィールドワークにおいてのみ可能となる思考の立ち上げとはいかなることか？

フィールドワークの疑似体験・思考の追跡を組み写真で表現する
単純化しないパターンの類型（KJ法）し、空間編成



詳しくは以下のQRコードから
あるいは「展示でフィールドワークする」
「喚起的組み写真」で検索

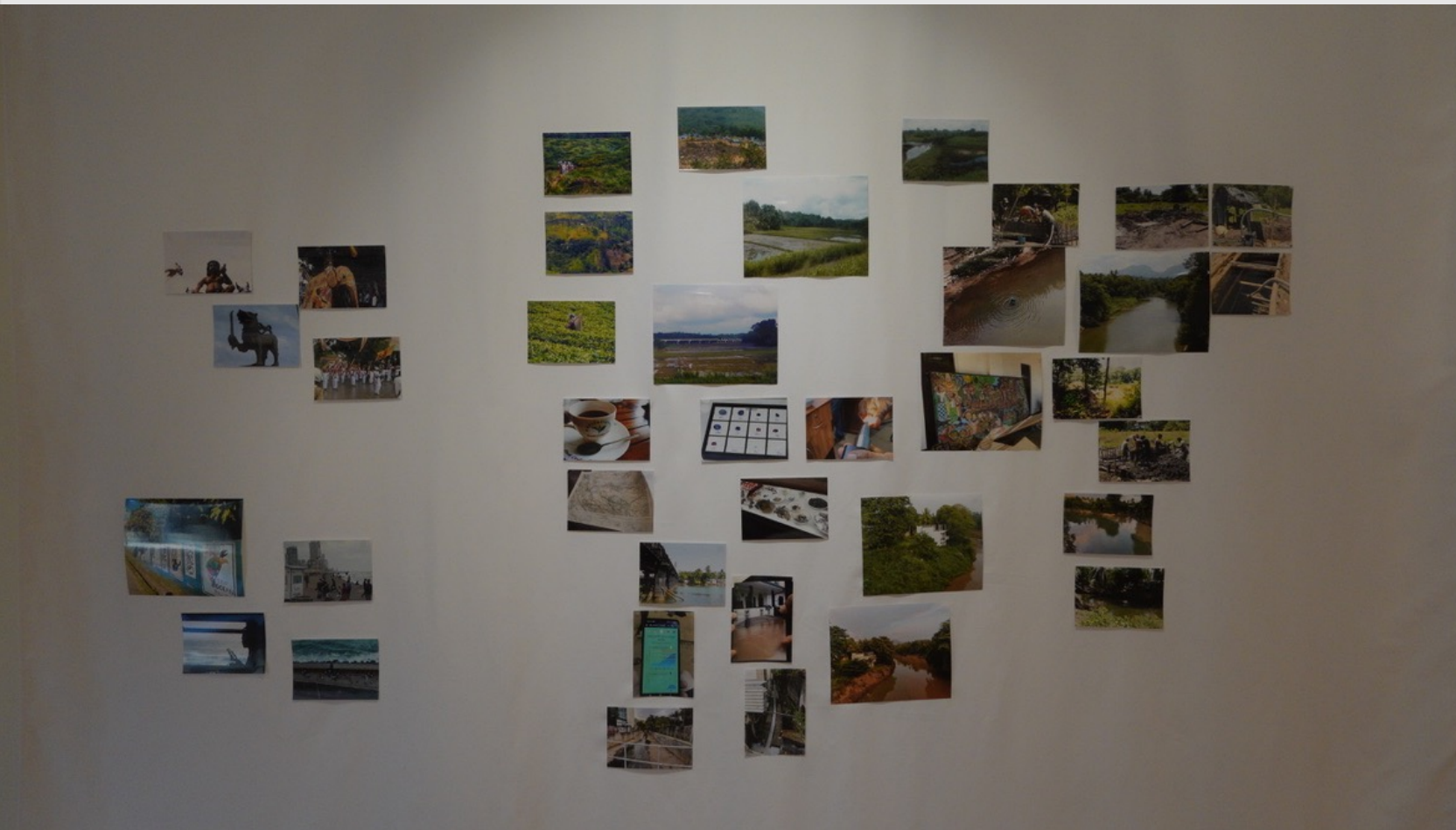


自然・宗教…などの類型を作らず、目算でメッセージ性をつくらないようにすると、何ができる？

フィールドワークを展示する

フィールドワークにおいてのみ可能となる思考の立ち上げとはいかなることか？

フィールドワークの疑似体験・思考の追跡・単純化しないパターンの類型（KJ法）



神崎隼人さん

（大阪大学・人類学・ペルー
アマゾン川における環境開発と
保護/先住民運動）

「人類学者の足跡、人類学者たちの足跡」

都市・海岸と農村・山間という軸から
左→右に土田がフィールドを探究する様子

河川というフィールドの共通ゆえに
模範的な配置のように思えた。
土田のフィールドでの思考の再現度が
高い！という直観と驚き
（どうしてそう思えたんだろう？）

フィールドワークを展示する

フィールドワークにおいてのみ可能となる思考の立ち上げとはいかなることか？

フィールドワークの疑似体験・思考の追跡・単純化しないパターンの類型（KJ法）



藤田周さん

（東京外国語大学・人類学・ペルー
現代料理における創造、おいしさの
探究、料理におけるグローバリゼー
ション）

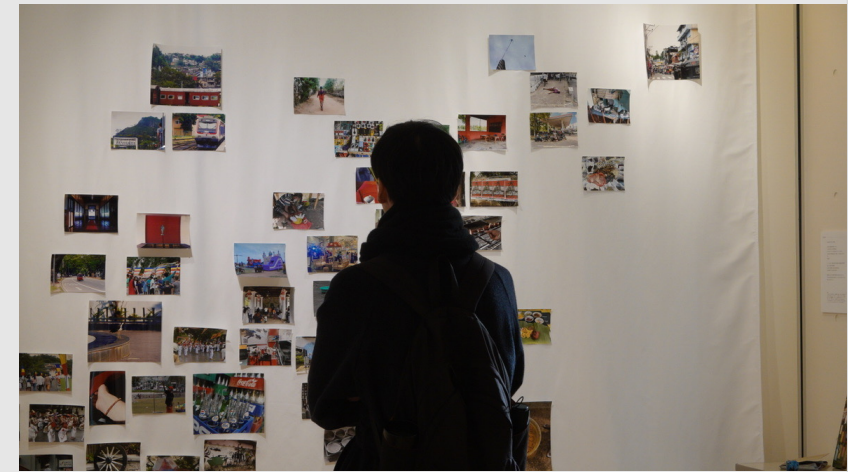
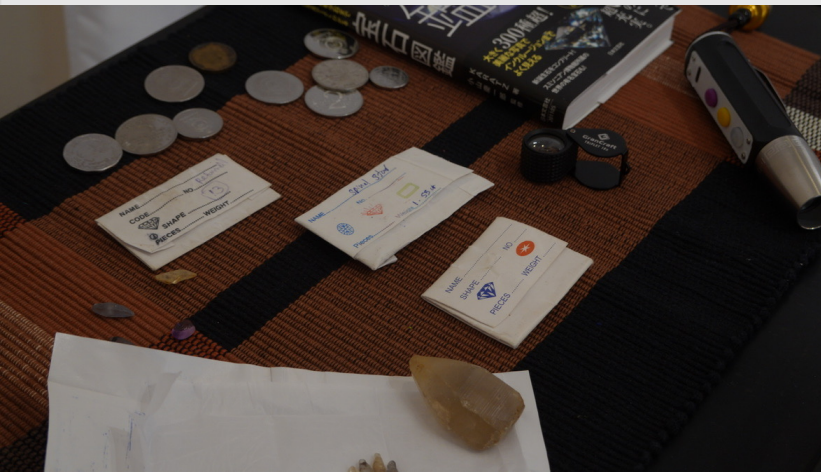
「泥から生まれるもの」

左→右に、ラトゥナプラに
もたらされるものが現れる。
水や泥から生み出される恵みや彩り、
自然と文化の二元に分けられない
ものが流れ込む

中央左、泥のように見えてセメントの
写真が挿入・配置される
撮影者と編集者、観覧者の間での
意味と表象の取り違えを考えたい

展示でフィールドワークする

宝石や宝石商の道具、スパイスの展示、トークイベント、組み写真体験コーナーを空間に構成配置



土田も組み写真(右下)をつくり、作品から触発されて自らフィールドのイメージを組み替えていく

わたくしの/と学問を刻む未来にあたって

共有して持ち出したい問い

- 写真だけ見ても撮っても、フィールドワークをしたことにはならない。
なおさら、他人のフィールドワークなんてわからない。
フィールドワークで観察してきたことと理論・批判・更新を論理的に文章に鍛え上げて、
人びとやある対象に関する生活や論理などを表す民族誌/エスノグラフィーとなる。
文章ではなく、ましてや他者によって編集・構成・展示された組み写真が
どうしてフィールドワークになりうるのか？
もしくははなりえないと考えるなら、何の要素がないからだろうか？
- 組み写真によって、フィールドワークをしてきた私はどんな新しいイメージや表現、モチーフが
表現できるだろうか？それは論文になりうるのか？エッセイ止まりか？
徹底した思考は同じなのに、どうして表現によって価値は異なるのか？
- フィールドにおける私の感覚や身体経験に価値はあるのだろうか？それはどのような？
- 研究の取るに足らないことは、社会上においても取るに足らないのか、還流しえないのか？